様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３３９０８
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ１２９９１

研究課題名（和文）ポール・クローデルの作詩理論と日本滞在経験との関係についての研究

研究課題名（英文）A study on the relationship between Paul Claudel's theory of poetry and his experiences in Japan

研究代表者
学谷　亮（Gakutani, Ryo）

中京大学・教養教育研究院・講師

研究者番号：００８０１９７９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、20世紀フランスの詩人・劇作家・外交官であるポール・クローデルが駐日フランス大使として日本に滞在中に発表した詩論『フランス語詩句に関する考察と提言』（1925）において、その作詩理論がクローデルの駐日大使としての日本滞在（1921-1927）中の経験といかなる関係を取り結んでいるのかを明らかにするものである。そのことによって、クローデルの作詩理論を構成する諸概念が、彼がいくつかのテクストで題材にした日本文化から受けた影響を浮き彫りにできた。また、クローデルの詩が大正期の日本の詩人たちからどのように解釈されたのかも明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
『フランス語詩句に関する考察と提言』は、クローデルが詩のスタイルを大きく変革する時期に書かれたものであり、また近代フランスの主要な詩人（ユゴー、ボードレール、ランボーなど）への言及を数多く含むという点でも、クローデルの詩を理解する上で欠かすことのできないテクストである。しかし、このテクストが日本滞在中に執筆されたという点はこれまでほとんど着目されておらず、本研究はこの詩論と日本との関わりを初めて明らかにしたという学術的意義をもつ。また、当時の日本人がクローデルの詩から受けた影響の一端も解明でき、日本という国に深く根づいたこの詩人の実像により肉薄する契機を作ることができた。

研究成果の概要（英文）：This study analyses the relationship between Paul Claudel's theory of poetry in his essay "Reflections and Proposals on French Verse" (1925) and his experiences in Japan as the French ambassador to Japon from 1921 to 1927. It clarified how the concepts of his theory of poetry were influenced by Japanese cultures on which he wrote some texts. Il also showed how Japanese poets in the era of Taisho interpreted Claudel's poetry.

研究分野：フランス文学

キーワード：ポール・クローデル　日仏交流　フランス詩　フランス文学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（1）クローデルは詩人・劇作家として知られるが、外交官を本業とし、在職期間の大部分をフランス国外で過ごした。そのため、非ヨーロッパ文化にも強い関心を抱き、自らの文学の糧とした。とりわけ、1921 年から 1927 年まで駐日大使として日本に滞在した際の経験が、彼の文学に与えた影響はきわめて大きい。
（2）日本滞在中に成し遂げられたクローデルの仕事の一つに、自らの作詩理論の体系化を試みた詩論『フランス語詩句に関する考察と提言』（1925）がある。当時のクローデルは、日本という他者との接触を通してフランス的な詩の伝統の見直しを行いつつ、新たな表現形式となり得る詩の在り方を探求していた。『考察と提言』は、そうした探求の足跡をたどる上で重要な文献である。
（3）しかし、これまでの研究では、『考察と提言』と日本との関わりは全くと言っていいほど指摘されてこなかった。『考察と提言』を読解した先行研究では、この詩論がクローデルの日本滞在経験とどのような関係にあるかは言及されていない。また、日本滞在がクローデル文学に与えた影響に関する先行研究では、『考察と提言』が分析対象になっていない。そこで、『考察と提言』が日本滞在中の経験から受けた影響について研究を進める必要があると考えた。

２．研究の目的

（1）『考察と提言』で提示されたクローデルの作詩理論は、フランス詩の伝統を批判的に検討しながら展開されているのみならず、日本の文学や芸術から多大な影響を受けていると考えられる。そこで、クローデルの作詩理論がいかなる知的背景のもとで構築されたのかを明らかにすることを第一の目的とした。
（2）日本におけるクローデルの詩作は、『考察と提言』が完成した 1925 年以降に集中して行われているから、『考察と提言』の内容は創作での応用を視野に入れたものだったと考えられる。そこで、クローデルの作詩理論が実作の場でどのように応用されたのかを明らかにすることを第二の目的とした。

３．研究の方法

（1）『考察と提言』の中にクローデルの日本滞在経験の痕跡を見出すため、まずテクストを精読し、具体的にどのような影響がみられるかを考察した。その結果、特に 1～5 章には日本文化からの影響を受けたと思しき箇所が数多くみられ、とりわけクローデルの作詩理論において中心的な役割を果たしている「空白」という概念に日本からの強い影響があると考えられた。そこで、クローデルが日本文化について論じたテクストを参照し、『考察と提言』との比較分析を行った。
（2）『考察と提言』および関連テクストの分析作業と並行して、日本滞在中のクローデルに関する実証的な調査を行った。とりわけ、クローデルが大正期の日本の詩壇、文壇、学術界とどのような関わりをもっていたのかを重点的に調査した。

４．研究成果

（1）本研究では、『考察と提言』を中心としたクローデルのテクスト読解、ならびにクローデルと日本との関わりをめぐる調査を通じて、クローデルの詩学と日本との関係を明らかにすることができた。
（2）クローデルが日本で執筆した日本文化論のうち最も重要なものは「日本人の魂へのまなざし」（1923）であるが、このテクストは、1922 年 8 月に日光で行われた講演「日本の伝統とフランスの伝統」を大幅に加筆修正したものである。しかし、これら 2 つのテクストが具体的にどのような差異を孕んでいるのか、そしてどのような意図で書き換えが行われたのかについては、これまでほとんど研究されていない。そこで、「日本の伝統とフランスの伝統」をめぐる歴史的背景を、関連資料に当たりながら可能な限り調査し、クローデルの「伝統」観がいかなる文脈から生まれてきたものであるかを明らかにすることを試みた。その結果、このテクストが、当時の日本で話題になっていた「伝統主義」をめぐる論争と密接な関わりをもつという事実を解明した。さらに、日光での講演が駐日大使としての任務の一環として行われたものであることに着目し、それを「日本人の魂へのまなざし」と比較することで、クローデルにおける「外交」と「批評」の関係性について論究した。

（3）クローデルは 1927 年 2 月に大正天皇の大喪儀に参列し、そのときの印象を「ミカドの葬儀」（1927）と題するテクストに記している。しかし、このテクストは大喪儀の単なるルポルタージュではなく、大喪儀への参列を経てクローデルの日本観がどのように変化したのかを跡づけており、とりわけ「日本人の魂へのまなざし」には見られなかった「清浄」という概念への言及がある点が注目に値する。そこで、大喪儀の記録と照合しながら、また「日本人への魂へのまなざし」と比較しながら「ミカドの葬儀」を読解することで、クローデルの日本観の核にある二概念である、「崇敬」と「清浄」のもつ意味を明らかにした。
（4）クローデルの日本滞在中、彼の詩が当時の日本人にどのように受け入れられたのかについてはまだ十分に明らかになっていない。クローデルと日本の詩壇との間に開かれた交流としては、大正期最大の詩人団体である詩話会及びその機関誌『日本詩人』との交流がよく知られているが、詩話会出身でありながら『日本詩人』とは異なった媒体で創作活動をした詩人たちもまた、クローデルに注目していた。そこで、前田鐵之助及びイナ・メタクサを中心とする同人詩誌『詩洋』とクローデルの関わりについて、1927 年 2 月にクローデルの離日を記念して製作された『詩洋』誌を分析することで明らかにした。なお、この『詩洋』クローデル記念号は、これまでいかなるクローデル研究者も言及していない、新発見資料である。
（5）『考察と提言』の 1～5 章に登場する「空白」の概念は、「日本人の魂へのまなざし」や「ミカドの葬儀」といった日本の自然観・宗教観を扱ったクローデルのテクストのみならず、「日本文学散歩」（1925）に代表されるような日本文学論とも密接な関わりをもつ。そこで、こうしたクローデルの日本文化・文学論と比較しながら『考察と提言』を分析することで、クローデルの詩学の根幹をなす「空白」の概念に新たな解釈を与えることに成功した。
（6）以上のような考察結果を得たが、こうして得られた知見は、論文の形で公表した。また今後、これまで考察したことをまとめ、『ポール・クローデルの日本観と詩学』（仮題）として、単著として出版する予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 学谷 亮	４．巻 41
２．論文標題 滞日期ポール・クローデルの詩学における「空白」の概念――詩の存在論をめぐって	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Stella	６．最初と最後の頁 339～356
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15017/6632448	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 学谷 亮	４．巻 48
２．論文標題 ポール・クローデルと詩誌『詩洋』	５．発行年 2022年
３．雑誌名 仏蘭西学研究	６．最初と最後の頁 18～36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 学谷 亮	４．巻 40
２．論文標題 ポール・クローデルの日本観と大正天皇崩御 ：「ミカドの葬儀」を中心に	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Stella	６．最初と最後の頁 201～215
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15017/4752576	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 学谷 亮	４．巻 119
２．論文標題 滞日期ポール・クローデルにおける批評と外交の接点	５．発行年 2021年
３．雑誌名 フランス語フランス文学研究	６．最初と最後の頁 225～240
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20634/ellf.119.0_225	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 学谷　亮
2．発表標題 大正期のポール・クローデル受容とフランス象徴主義の移入
3．学会等名 京都大学人文科学研究所共同研究班「ポスト=ヒューマン時代の起点としてのフランス象徴主義」（招待講演）
4．発表年 2022年

1．発表者名 学谷　亮
2．発表標題 駐日フランス大使ポール・クローデルと1920年代の日中関係
3．学会等名 科学研究費助成事業基盤研究（B）「上海フランス租界を結節点とする日仏中三か国の文化交流史」（課題番号：20H01302）研究会（招待講演）
4．発表年 2021年

1．発表者名 学谷　亮
2．発表標題 滞日期ポール・クローデルにおける批評と外交の接点 ―「日本の伝統とフランスの伝統」をめぐって
3．学会等名 日本フランス語フランス文学会 2020年度秋季大会
4．発表年 2020年

〔図書〕　計1件

1．著者名 学谷亮、榎本泰子、森本頼子、藤野志織、他11名	4．発行年 2022年
2．出版社 勉誠出版	5．総ページ数 304
3．書名 上海フランス租界への招待	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関